

空

平成29年8月31日発行

第15巻4号

通巻第74号

空



2017・8

**SORA** 74号

# 三十句

柴田佐知子

どこまでも泳ぐ目をして桜鯛

干潟より子を抜き取つて帰りけり

巡礼をまたひとり入れ春の山

千年も待てば私も大桜

水あれば光あつまる端午かな

夕映や遅れて廻る金魚の尾

次の世を待まぬ髪を洗ひけり

大差つく子に遠泳の舟が寄る

地の熱を奪ひつつ蛇進みけり

斉唱の身を垂直に日の盛り

—「俳壇」七月号より—

一村の芯に秘仏や櫟の芽

暁の大地ごと鶴引かむとす

あちこちに寺置いて山笑ひけり

田の神を拝して畦を焼きはじむ

勝鶏となる一蹴を天に出て

籠に血を付けて負鶏押し込まる

また枝を掴み直しぬ巢立鳥

返事待つとき全山の桜消ゆ

春風や見えて登らぬ山ばかり

何となくひとりで生きてシクラメン

音のなき雨がしばらく仏生会

配膳のしづかな起居竹の秋

叱られし子に猫の子を抱かせやる

吹き口の傷んできたる紙風船

桜鯛選り抜かれて神饌に

清明や肩を四角に師範代

山寺や遊び暮して羽抜鶏

保護色のスーツ冷房裡の会議

その裏は蜘蛛が罟を張るネオン街

雷鳴の近づく米を研ぎにけり

―ワエツプ俳句通信― 九十八号より ―

福岡 高倉 和子

どんたくの音を重ねて進みけり

膨らみて何処へも行けぬ鯉幟

藤棚の下で発光するごとし

五月憂しすぐに飽きたる万華鏡

噴水の一糸乱れず止まりけり

十葉や壁に広がる雨のあと

ふるさとの畳を思ふ素足かな

たつぷりと眠りし朝の冷し瓜

東京 中田みなみ

鼻先を風と過ぎたる初蚊かな

聖五月どの葉も風に強くなり

丘陵の小雨上りぬ更衣

いよよ明日手術苳をつぶしをり

肺半分失ひし息蜘蛛を吹く

地虫鳴く鼻をかむにも力要り

昇天祭持ち馴れて来し杖の艶

久々に西瓜の丸さ抱きにけり

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

ジーンズをたはしで洗ひ風五月

露のぢい露のしうとめ陽に揺るる

洗濯物一と日揺れゐる新樹かな

ひと夜身の衰へを知る落し角

病人に外出許可や麦の秋

亀鳴いて連体形に余韻あり

種袋振れば近づく波の音

青光りして赤潮の夜の果

死の迫る猫が家出る茅花かな

トーストにのせるもろもろ暮の春

露天湯より対岸の阿蘇みなみかぜ

万緑のもりあがりくる無縁坂

夏深し壺中の骨に力得て

夜濯や旅のホテルの片隅の

オルガンもピアノも弾かず茄子植ゑて

校長と名づけし墓や今年また

福岡 柴田志津子

万歳で終る行事や五月晴

砂浴びの鶏が駆けだす日雷

捕虫網ごと預りし子をもてあます

五月雨の変へてゆきたる川の相

杖ついて卯浪の船に立つてをり

出港の汽笛のとどく夏料理

走りだし赫くなりたる羽抜鶏

姉上へと書かれ新米届きけり

福岡 岸 洋子

野藤に手届く九十にも届く

ひとり居は汗ばみ急ぐこともなし

昼寝覚声ととのへて取る受話器

声ぢから褒められ草矢飛ばしみる

カタカナは声出して読むさくらんぼ

齡ゆゑと事すますまじ更衣

かしづかれたき思ひも少し母の日は

たつぷりとある夕暮や花菖蒲



北九州 深川 淑枝

兵庫 戸栗 末廣

漁師けふ白法被着て山車廻す

草木も歎いてゐたる涅槃変

太鼓打つきつく結ひたる祭髪

けだものに聞く耳二つ仏生会

綿菓子の子の箸流れくる祭川

馬の眸の濡れある八十八夜かな

鉢巻に遠く海鳴る山車解き

五月闇より樟の葉の匂ひけり

貝母咲く寺井戸の辺に影ふえて

あをあをと山迫り来る昼寝覚

蛇穴を出て玄室の石構

刻々と沖に雲起つ御祓かな

土手を打つ影はたはたと鯉のぼり

父の日の何ごともなく日は山へ

川石を跳び少年の素足美し

夏果つる浪が礁を攻めつづけ

粕屋 吉 田 葎

天地を巨石の渡す立夏かな  
記紀神話地鳴のごとく牛蛙  
牙はまだ全きかたち蝮酒  
座敷まで襖をはづす祭かな  
御神体もみくちやにして夏祭

大阪 田 岡 千 章

桜蕊降りつぐ鯉の鼻孔にも  
花あしび鹿の眸のこぼれさう  
八十八夜川埋め立てて橋残る  
藤波や日本に古式立ち泳ぎ  
藤の花揺らぐに非ず吾のゆらぐ

福岡 角 野 良 生

能古島五句  
ぐんぐんと島が濃くなる春の航  
枇杷の島信徒十戸の天主堂  
防人の島の高さや鯉のぼり  
うぐひすや窯址に遠き火の記憶  
檀一雄絶筆の句と春惜しむ

福岡 亀 井 紀 子

順々にととのつてゆく田植かな  
天清和重機の腕拡がりぬ  
古火鉢少し揺らせる目高かな  
夏霧や埋められてゆく鶏五万  
短夜や動かぬ父の北枕

糸島 小林 朱 夏

井戸水で手足を洗ふ帰省かな  
浜木綿や父より黒き漁師の子  
帰省子の車に入るる米と味噌  
蝉銜へ飛べずに落とす雀かな  
ふるさとや縁より飛ばす西瓜の種

岡垣 田中とし江

曇ぐもり繕ふ漁網波止に満つ  
種蒔は畝に置くのみ落花生  
顔入れて芍薬長く剪る夕べ  
波引けば砂鉄の綺羅や夏の昼  
伸び上がり道を教ふる溝浚へ

福岡 永淵 恵子

新緑に唐白の音ゆるぎなし  
青楓人を恐れぬ鹿ばかり  
帽子屋の店主の帽子燕の子  
耳痛きことは聞こえず心太  
退屈の色に開きて水中花

福岡 山内 碧

依代は相生の檉夏の雨  
てのひらにまだ酢の匂ふ春祭  
待つといふときめき遙か花は葉に  
自転車シャツを帆のごと青田ゆく  
羽抜鶏犬に追はれて羽落す

兵庫 林 徹也

湯呑手に母の見てゐる春の海  
ゆく春や大道芸を独りで観る  
母の日やシンガーミシン軽やかに  
サングラスはづして入る懺悔室  
夏蝶や化粧櫓の格子窓

大宰府 山 本 則 男

息詰まるほどに巻きたる落し文  
猪垣の中に猪垣花南瓜  
円熟の形なりけり蟻地獄  
鳴きとほす声のむらさき青葉木菟  
山国の理髪店にも囷鮎

千葉 原 友 子

芒種はや草にかむさる草の影  
夏雲を光背として像くすむ  
井戸水を崇めて使ひ麦の秋  
更衣夫に映画を誘はるる  
出してまた収めて祖父の白上布

福岡 あさなが捷

父さんと電車に乗りし浮袋  
首立てて蛸が甲板這ひ回る  
双方の親子一礼夏座敷  
言ひつとり残り残されし遠花火  
苛だちの収まる水を打ちにけり

粕屋 秋 千 晴

平尾山荘 五句

阿蘇を焼く観光コース変更し  
風向きに声荒らげて野火叩く  
山焼のあとを見回る消防車  
うづくまる牛馬に草の萌え始む  
夏初め間近に見たる馬の貌

熊本 松 田 明 子

三十年生きて金魚の遠慮がち  
境内に羽脱ぎ散らし羽抜鶏  
本堂の一段高き円座かな  
牡丹のひとつひらぶつに風かよふ  
袋掛脚立のうへの指図かな

福岡 矢野 百合子

校塔の時計の響く春休み  
春落葉落ちて艶を失はず  
長汀を引く波長し夕長し  
歩調とり通ひしことも昭和の日  
良き名持つ芍薬開く菟裘の地

福岡 栗原 京子

草餅や卓の乱れをわびながら  
川に沿ひ数多の退きし鯉幟  
紙魚逃げてゆくなり物理問題集  
春の暮小さき池に小さき鯉  
白南風やひよこの時は短くて